

武者ぶるい論

坂口安吾

青空文庫

妖雲よううん 天地にたちこめ、円盤空をとび、巷ちまたの天文家は戦争近しと睨にらんだ形跡であるが、こと私自身に関しては、戦争になつても余り困らない人間だ。どうなろうと運命だから仕方がないという考えは私の持病なのだから。もつとも、運命とみて仕方がねえやと言っただけで、火の子だの地震だの戦争に追いまくられるのが好きな性分ではない。

強いて闘争を好まず、ただ運命に対処する、という心掛けは、平穩温和の精萃せいすい、拔群の平和主義者というべきかも知れない。だから私のような人間はバカげた思想を好む。

黄河こうがという河はふだんは水がないが、大雨がくると黄土の泥でいり

流^{ゆう} あふれたつて一年に何メートルも河底に泥が堆積^{たいせき}する。あげくに河床が平地よりも高くなつて二、三十年目には必ず大洪水を起すという因果な河だ。この川が洪水を起すと、昨日まで利根^{とね}川^{がわ}を流れていた筈^{はず}の黄河が、今日は天龍川上流辺からドツとあふれて名古屋の海へ流れこみ、その中間の何百方里が湖水になるという大変動をやらかす。五千年前から黄河治水を専門の学者政治家^{さんざん}が散々^{さんざん} 智恵をしぼつても、今日に至るまで、全然五千年間定期洪水の起るがままである。

そこで今から二千年ほども昔に、水と地を争うべからず、という名論をだした黄河学者がいたのである。つまり洪水と張り合つて生きるのはムリだというのだ。防ぎようがないのだから、勝手に

に洪水を起させておくに限る。その代り、洪水地帯の住民をそつくり洪水のない地方へ移住させてしまえば、洪水がなくなつたと同じことだ。こういう名論である。もうちよつとデカダンの学者は、黄河の洪水を天命と見て、だいたい支那というところは百姓どもが人間を生みすぎて困る国だ。洪水のたびに五十万ぐらいつつ死んでしまうのは人口調節の天命であるから、天命に逆らわぬ方がよろしい、という説を唱えた。唱えた当人は太平樂かも知れないが、天命によつて調節される五十万人の一人に選ばれることちの方は助からないから、同じ運命論でも、水と地を争わず、洪水は洪水の勝手にまかせ、人間はさつさと逃げてよそへ住みつけという穏やかな方が好ましい。しかし聖賢はこれを巧こうげん言れいしよく令色

というね。逃げた土地の先住民は大迷惑であるし、洪水にまかせ
る大沃野だいくやは実利の大損だ。学者は利巧そうな勝手なことを言う
が、住民は洪水を承知で実利の方へ戻ってくるに極きまっているもの
だ。

こういう怪物の対策には中間がない。運命にまかせるか、完全
にねじふせるか、である。完全にねじふせるのは大変だ。万里ばんりの
長城の比ではない。近代科学の精萃とマジノラインの何千万倍ぐ
らいのコンクリートを使用しなければならぬだろう。それだけ
の大資本や科学陣がともなわぬうちは、運命にまかせるよりほか
に仕方がないのである。中途半端なアシライよりは逃げるに如しか
ずということが五千年の悪戦苦闘でハッキリしているのだから。

私は戦争というと黄河を思いだして仕様がなない。同じぐらいの怪物だ。そして、黄河学者の名論や遺訓が大そうふさわしく役に立つ。水と地を争わず。これを戦争の場合は水を火の字に置きかえればよい。この火を防ぐのはムリであるから、さっさと逃げる。さもなければ、手をあげる。抵抗したってムダである。

人口調節の天命とみるデカダン派は將軍の思想で、東条流。人口調節は戦争よりもコンドームの方が穏当だ。けれども避妊薬ひにんやくを国禁しても、戦争を国禁したがない政治家や軍人が多いから、庶民どもは助からない。東条流という奴は、將軍自体にとっては太平樂なものだ。自分自身だけは人口調節の天命によって指定された一員に数えていないのだから。MPが迎えに来て逃れぬ運命

が分るまでは、人口調節に服さないツモリなのである。人口調節に服す身の切なさが分つていけば、戦争なぞやれないはずだ。これを聖賢の言葉では、自分の欲しないものを人に施すな、と言うのである。

しかし兵隊になりたがる奴がいるからいいじゃないか、というのは、水と地を争わずの逆なのである。実利があれば洪水を承知でも住みつく。食えない人間は兵隊になる。洪水が好きだというのはウナギかナマズで、人間ではなからう。人殺しが好きだったり、威張るのが好きだったり、それで兵隊になった、という特別な人種は本来聖賢の言葉に無縁のケダモノなのだから、ジャングルへ移住して勝手なことをやってくれと助かるのだが、そうは

いかないところに、火と地を争うべからず、つまり戦争になつたら、手をあげたり、逃げたり、決してムリに逆らわないことにしましょう、という思想の卓抜な所以ゆえんが分るのである。

もつとも、運命主義者というものは運命に逆らわぬだけが能ではない。逆らつてもムダという理を会得するに至つて逆わないのであるから、逆らえばもツと巧うまくいくという理が算定できれば逆さうのである。狂犬に出会つたら逆らわず、噛かまれなければならぬといふ定式が、あるわけではないのである。大資本と現代科学の萃を集めれば黄河をねじふせることはできるかも知れないが、貧乏ではとてもやれない。それで逆らわないだけである。

戦争も同じことだ。戦争などというものは無い方がいいにきま

っているが、さしあたって無くする方策は見当らないし、まして日本のように自分の主張が何一つ通らぬ国の人間のことだから、大それたことを企むたくらイワレは一つもない。ただもう運命にこれ従い、ただちに手をあげ、ただちに逃げれば足りる。

戦争という一向に実利のない仕事にどうしても多くの国々が精を入れるのだから、私は頭が悪いから、どうにも理解がつかなくて仕様がなない。軍備などという反生産的な物をそっくり生産面にふりむけ、トーチカや軍艦をつくる代りにアパートだの病院でも造った方が、悪い筈はなかるうと思うが、そうでもないのかな。

然し、戦争来れ、と待ちこがれている日本人が、老若男女ろうにやくなんによシコタマいるのには驚くのである。私の言うのは軍国主義者、右

翼浪人のことではなくて、百姓だの小学校の先生だの坊主だの女給だのパンパンだの商人だの、つまりあまねく庶民に於ておいのことなのである。

しかし、彼らの論理は無邪気である。この前の戦争で狡ずるい奴らに先を越されて損をしたが、今度はチャンと要領を覚えたから、今度戦争になつてみる、買かい溜だめ、売かり惜みしみ、闇屋やみや、持もち逃げタダ拾あい（戦争中は泥棒なんて言葉はないや。持もち走り、先まき拾あい。所有権なんて在ありやしねえぞ。それをチャンと心得こころえたんだ）モウケ放題にモウケてやるから覚おぼえてやがれ。こういつて、坊主も、先生も、女給も、妾めかけも腕ぶを撫なでているのである。

百姓とくると、もつと猛烈である。都会の商人も会社員も職工

も家をやかれ着のみ着のまま命からがらの戦火に煽あおられた敗残者であるが、百姓は高見の見物だもの。燈火管制とは何だ？ 十二、飛行機がくる？ くるが、どうした。オレの頭の上もいつペン飛んだが、なんでもねえや。なんでもないに極まつてらア。案山子かかしの同族野郎め。

戦争がくると、ふだん威張いばつてやがる都会の野郎が泣きついてきて、ペコペコ、着物を身ぐるみぬいで、段々ウス汚い女中みいたいな女ばかりになりやがって、こつちじやア自然に着物がふえるんだナ。モーニングまで貯たくまりやがったよ。シルクハットだけ、なかつたなア。背広だのネクタイだの腐あつまるほど集あつまりやがるもんで、ワイシャツの着方きかたてえものを覚えなきやアならねえな。戦争は文

明なものだ。銀座なんてえものは戦争がくると奥州蛇谷村字安達ヶ原へ集るね。戦争が済んで二、三年も、まだ文明だね。戦争ぐらい文明平和なものはねえな。戦争が済んでから四年目ぐらいにダンドン世の中が悪くなるらしい。都会の奴がゼイタクを覚えるとロクなことは有りやしねえ。どうも世直しに戦争が始らねえと、もう日本はダメになるぜ。今度の戦争が始つてみやがれ。ポリ放題にボツてやるから。ギャバジンの三ツ揃みぞろいぐらいじやア、めつたなことで米の一升も売つてやらねえから覚えてやがれ。

虎視こしタンタン、戦争をはるかに望んで武者ぶるいしている老若男女が数知れないのである。しかし、やっぱりダメだろうね。戦争の要領を覚えたツモリでも、新手を打つのを天才といって、生な

まびようほう
兵 法 はおおけがは大怪我の元という通りだ。習い覚えた要領も、次の戦争のドサクサには役に立ちそうもないらしいや。

私がこういつていさめると、彼や彼女はフンと笑って、コイツ戦争に自信がないな、次代の斜陽族か、とお考えになるのである。人生に夢は大切だ。然し、戦争の味を覚えた、という虎視タンの武者ぶるいは、夢というには、あまりに悲しい。今や日本に底流をなして重くうごめいている潮の流れは、これを野武士の夢、野武士の精神というのである。

空にB36が、どこかに原子バクダンがバクハツしていても、生きている人間は野武士にすぎないのだ。何百年、いな否、千年前の群盗にすぎないのである。それが千九百六十年になっても二千年に

なつても、常に戦争というものの姿だ。原始のままなること黄河に溢れる泥の流れの如く素朴な原人の姿にすぎないのである。

戦争の正体とは、かくの如きものだ。今度戦争になろうが、その又次に戦争になろうが、庶民の生活は破れて、人口調節に服して死ぬか、野武士になるか、その本態に变りのある筈はない。戦争に变り榮えがあつたら、お目にかかりたいものだが、しかし拙者は変り榮えがないと会得しているから、戦争来たれなどと武者ぶるいはしない。しかし戦火と地を争う愚はしないだけのことだ。

青空文庫情報

底本：「墮落論・日本文化私観 他二十二篇」岩波文庫、岩波書店

2008（平成20）年9月17日第1刷発行

2013（平成25）年4月5日第6刷発行

底本の親本：「月刊読売 号外版」

1951（昭和26）年2月

初出：「月刊読売 号外版」

1951（昭和26）年2月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-

86) を、大振りにつくっています。

入力：Nana ohbe

校正：酒井裕二

2016年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

武者ぶるい論

坂口安吾

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>